

幼児のための紙芝居の今昔



上 沢 謙 二

◇からくりから立絵へ

紙芝居の起りは、古く徳川末期に発していると言われる。享保年間（一七〇〇年代）にはじまった「のぞきからくり」や、享和年間（一八〇〇年代）にあらわれた「うつし絵」に影響されて、明治の早い頃に生まれた。のぞきからくりは、小さな舞台にからくり人形が出て所作するのをのぞいてみるもの、うつし絵は、ガラスに描いた画に、光線を当ててうつしだすもので、いずれも街頭で行なわれた。

それにヒントを得て「立絵」といわれるものがつくられた。それは人間の姿を両面から描いて貼りあわせ、中へ、串のような細い竹を入れて、演者はそれをもって、舞台のかけからうごかす。舞台は、縦一フィート半、横一ヤードくらいの大きさ

で、それを車に乗せてひいてある。そうして町の道ばたへとめると、集まってくる子どもたちに、まず、飴を売る。そうして幕をあげる。子どもたちは飴をなめながら立って、折重なつて見物する。のぞきからくりも飴を売ったので、それをまねたのである。

紙人形は両方から出てきて（演者は両手でもっている）チャンバラなどをやりだす。そうして一方がぱつきり斬られると、途端に、ぐるりとまわして、裏を出す。そうすると、血だらけになった姿があらわれるという仕組である。これが「紙芝居」といわれた。

毎日、おなじところへ大体きまった時間にくるので、子どもたちは待ちかまえている。それでなじみになって、あちこちまわるので一定の商売として成り立つようになった。

東京では、方々に見られるようになり、子どもばかりでなく、大人も足をとめるようになって、いつの間にか、街頭の人氣者になった。

これに目をつけて、画かきを雇って紙人形をつくり、売子を募集して、それに貸して料金を取るいわゆる貸元ができて、組織的な商売になった。

昭和五年頃、東京における貸元は三千軒近くになったといわれる。

◇立絵から紙製の人形へ

需要がひろまるにつれて、紙人形は製作に手数がかかるので、それに応じきれないようになったし、製作費も嵩んで値段も高くなるので、手数も材料ももっと簡単にできる平面的な絵にして、それを何枚か組合わせて、順々に抜きさしして進行するやりかたに変えるようになった。こうすれば、一人一人の別な人形をつくることはいらぬし、前景背景のような舞台装置も省けるようになったのである。

それで急速にひろまったので、児童の教育また社会の風教上から注意されるようになり、業者の側も反省して、昭和七年、東京において、日本画劇教育協会が組織されたが、参加者は千五百名に達したといわれる。

かくて次第に全国的にひろがったが、昭和八年には、キリスト教の立場から、令井よねによって、東京に「紙芝居伝道団」が生まれ、大阪日曜世界社から、西保保治によって同じ趣意の紙芝居が製作発行された。次で東京の全甲社から、昭和十年に「幼児紙芝居」が、十一年に「仏教紙芝居」が出版された。

なお、十年には、松永健哉による「日本教育紙芝居連盟」が誕生し、発展して「日本教育紙芝居協会」となり、会員三千人を擁するまでになったが、更に教材として学校にも取上げられ、児童たち自身による製作も奨励されて、後には、小学一年の教科書「エノホン」に、紙芝居の製作方法が載せられるようになった。

かくて教育界にとどまらず、社会的にも利用されるようになり、商店や会社の宣伝にも取上げられ、更に防諜防犯や、選挙粛正というような公け的な運動にも使用されるようになったのである。

ここで、高橋五山を逸することはできない。彼は早くより「教育紙芝居」を提唱し、その製作出版に努力すると共に、或は学者の意見に聴き、実際関係者の声に徴し、専門的な委員会を組織して、この方面の発達を促進した。彼は飽くまでも教育紙芝居と街頭の商業紙芝居を区別し、単に子どもをよろこばせる娯楽を目的とすることを排すると共に、窮屈な型を押しつけ

る形式的なものに墮することを戒しめ、深い教養性と高い教化性を兼ね備えるものでなければならぬことを主張し、これを貫ぬくために、一生を傾けた。その作品は、前記の全申社から出版したが、斯界に独自の感化を残したといえよう。

◇大東亜戦に利用される

時勢は移って、支那事変がひきおこされ、更に大東亜戦争に拡大して、國を挙げて戦時体制に入ったが、昭和十六年には、小学校は国民学校と改称され、翌十七年には、日本少国民文化協会が組織されて、児童の世界も全面的に戦争完遂に参加することになった。

特に紙芝居は実際の利用価値をそなえているので、出征軍隊や疎開児童の慰問に利用され、更に敵愾心を高揚する道具に一役買つて、例えば、昔話の桃太郎は、いわゆる鬼畜米英を退治するために、犬、猿、雉を従えて遠征するというような紙芝居がつくられて、実演されたりした。

更に昭和十八年には、日本少国民文化協会紙芝居部会によって、紙芝居台本に対し、企画審査が行なわれるようになったことは、いかにその影響力が重視されたかをものごたるものといえよう。

終戦直後は、あらゆる方面が虚脱状態に陥いつたが、児童文

化もその例に洩れなかつた。紙芝居もそのあおりを受けて、一時はひっそりしたが、二、三年後には、東京では、業者が千人を越すようになった。

当時はアメリカの管制下にあり、あらゆる方面に嚴重な取締りが行なわれたが、街頭の紙芝居も放置されてはならないと、東京都庁社会教育課内に紙芝居倫理規定管理会が設けられ、毎月一回、作品を審議するとともに、その指導が行なわれた。

この行きかたは地方にも及んだ。筆者のいる栃木県でも、その頃、県の方針として、県内諸市に、管内の紙芝居業者を集めて、作品の趣旨や、作りかたの方針や、話しかたの心得などを述べ、座談会をひらいて意見を交換する会がひらかれて、たびたび立会わされた。

◇テレビに取って代わられる

かくて、紙芝居は以前のような状況になるとみられたが、テレビという新しい文化が輸入されて、凄まじい勢いでひろまった。どんな山間でも、海辺でも、居ながらにして、さまざまな興味ある題材を見られ、聞かれるようになったので、わざわざ外出して、館を買って、紙芝居を見る必要がなくなった。それに都市においては、交通事情の混雑のために、表でおちついでなにかを見ているような余裕がなくなった。そんな事情から、

紙芝居はいつとはなく街頭から姿を消すようになったのである。

けれども、紙芝居そのものに対する興味がなくなったわけではない。特に幼児には訴えるものがあるので、現在は専ら幼児保育の施設において利用されるようになった。幼稚園保育時において、紙芝居をしないところはないだろう。そこで、子どもたちはよろこんでたのしんで見ている。もし、やめれば、必ず催促されるだろう。

だから、それを製造販売するところは、専門的な研究と丁寧な仕事をするようになり、以前にくらべると、一段と進歩した。けれども、まだ充分とはいえない。更に工夫と改善をする必要があることはいまでもなからう。

◇紙芝居に芝居はない

終りに、一言つけ加えたい。

それは「紙芝居」という名称である。「芝居」すなわち「劇」とは立体的なことばである。だから動きを含み、変化を含むことばである。

いかにも、以前の、竹の柄がついた両面の人形は、不充分ではあるが動きもあり、したがってそれ自身の変化も示された。

けれども、一枚の絵になると、平面的で立体的ではない。だ

から、いきさかの動きもないし、変化もない。ありのままひっぱりこまれる。それは動きとか変化とかいうのでなく一枚の「おしまい」なのである。そうして別な一枚が変って出てくるのである。

だから、見るものは、順々に別なものに接するのである。そこには直接つながりはないし、連続した変化もない。はなればなれの連絡に接するだけである。

これを「芝居」とはいえないだろう。

詳しくいえば、絵によるおはなしを聞くとはいえるし、おはなしによって絵を見るときもいふべきだろう。だから、これに「芝居」という名称を与えることは不適當であり、不適當という以上に、不合理ともいわれるだろう。

そういう状態が許されて、別に不合理とも感じられないのは、内容が変わったのに、形式が変わらないので、名称が自然にそのまま受けつがれたためである。だから、はじめてこれに接して、その呼称を耳にするものはへんに思つてとまどうだろう。

「芝居はどこにあるのか」と。

正に「芝居」はないのだ。

あるのは、絵と話である。だからこれは、「絵ばなし」と呼ぶのが適當ではなからうか。